

弘前市立弘前図書館所蔵の神田孝平から下澤保躬にあてた書簡

— 陸奥考古学界草創期の一断面 —

福田友之・福井敏隆

一. はじめに

弘前市立弘前図書館（以下、弘図と略記する）には、明治十九（一八八六）年から二十年にかけて、東京人類学会の神田孝平が弘前の国学者・下澤保躬^{やすみ}にあてた書簡が三通保管されている。これらの書簡は、当時の双方の親密な交友をうかがわせてくれるものではあるが、それだけではなく、わが国の考古学界草創期における本県の状況を垣間見させてくれるものでもある。書簡には、当時、神田が編集責任者であった『東京人類學會報告』・『東京人類學會雜誌』に、神田自身が発表した本県関連の報文には記載されていない新たな知見も見られ、本県考古学界草創期の状況を知る上で見逃すことのできない資料である。

そこで本稿では、これらの書簡の翻刻文を作成・紹介するとともに、主に考古学的な面から注釈をくわえてみたい。

なお、翻刻文（本稿三）は福井が作成し、一・二・四・五・註は福田が執筆した。

二. 神田孝平と下澤保躬

まず、神田孝平（一八三〇〜九八）（写真1）について述べると、『神田孝平略傳』^①等によれば、天保元年（一八三〇）、美濃国岩手村（現岐阜県垂井町）の生まれである。名前は孟恪^{たけのり}であったが、のちに孝平と称し、淡崖などと号した。漢学・蘭学を修めたのち、文久二年（一八六二）には幕府の蕃書調所の数学教授となり、明治元年（一八六八）には



写真1 神田孝平^①

開成所御用掛、四年十一月から九年九月までは兵庫県令として敏腕を振るった。この後十年二月まで元老院議員、さらに十三年二月まで文部少輔（※現在の文部

事務次官)、十三年二月から二十三年二月までは再び元老院議員、二十三年十月までは貴族院議員などを歴任した。三十一年七月には華族に列せられ、男爵位が与えられた。

神田は、このような明治を代表する洋学者・政治家であったが、早くから考古遺物を好み、当時は人類学の一分野であった考古学にも造詣が深く、所藏品には本県亀ヶ岡遺跡の土偶などもある。文部少輔時代の、十年九月十一月に米国の貝類学者E・S・モールズが行った東京・大森貝塚の発掘では、モールズに対し考古学的な助言を行い、さらに出土品の天覧も実現させている。彼の考古学者としての位置を高めたのは、十七年十二月の『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS OF JAPAN』⁽²⁾、十九年四月の『日本大古石器考』⁽³⁾(英文版の訳)の出版で、内外にわが国出土の石器について紹介した。

神田は、明治十九年二月からわが国初の全国組織である東京人類学会(事務局は東京大学理学部人類学教室)の機関誌『人類學會報告』(十九年六月から『東京人類學會報告』(以下、『東人報』と略記する))、二十年八月から『東京人類學會雜誌』(以下、『東人誌』と略記する))の編集・発行にも携わり、二十年七月から二十八年までは初代会長も務めるとともに、自身も精力的に寄稿するなど、会の発展に大いに貢献した。神田の収集品は、没後、大阪毎日新聞社社長の本山彦一に引き継がれ、現在、関西大学博物館に收藏されている。

一方の下澤保躬(写真2)(二八三八〜九六)は、『津軽古今偉業記津軽興業誌』⁽⁴⁾・『閑雲下澤保躬先生を仰ぐ 御遺稿と関係書簡集』⁽⁵⁾等によると、天保九年、弘前藩の微禄の長男として弘前に生れた。幼名は八三

郎、のちに閑雲等と号した。明治二年に弘前藩京都出張所詰合公用方取次役並筆生、翌年には公用方筆生として東京に転任し、その後、七年の太政官記録課分局(※のちの文部省修史局)勤務等を経て、十一年には『津軽旧記類纂』・『津軽旧記傳類』を編纂している。長く岩木山神社の神官を務め、国学者・歴史家・歌人としても知られているが、とくに、六年十二月には、現在、毎年皇居で行われる「宮中歌会始」に、皇族・側近等以外の一般庶民から和歌の詠進ができるよう宮内省に建白し、翌七年一月に採用されるようになったのは、下澤の功績として知られている。

明治十六年十二月に家督を長男に譲って以降、著述に専念したが、十九年八月に神田と出会って以降、「人類学」(※現在の考古学・民俗学等を含む)にも関心を示し、同年十二月の『東人報』に「石ノ鞋草(※草鞋であろう)ト稱フル古石器」⁽⁶⁾と題して、本県人としては最初に寄稿して以降、二十六年まで、『東人報』・『東人誌』に、下記の報文を寄せている。ただし、下澤は最後まで「東京人類学会」には入会していない。



写真2 下澤保躬

当時の会則では、非会員であつても投稿はできたのである。また、縄文土器やヒスイの勾玉⁽⁸⁾など若干

の出土品を所蔵しており、ヒスイの勾玉は現在、弘前大学人文学部北日本考古学研究所センター（成田コレクション）に収蔵されている。

① 神田孝平「岩木山神社石櫃ノ記」『東人報』第二卷第一二号、一八八七年⁹⁾

② 和田萬吉「陸奥弘前下澤保躬氏ヨリノ来書」『東人報』第二卷第一六号、一八八七年

③ 淡 崖「瓶ヶ岡土偶圖解（前號卷末ノ圖ヲ見ヨ）」『東人誌』第三卷第二二号、一八八七年¹⁰⁾

④ 下澤保躬「陸奥弘前ノ風俗一斑」『東人誌』第五卷第五〇号、一八九〇年

⑤ 下澤保躬「陸奥弘前士族某家（世録二百石）年中行事一斑」『東人誌』第六卷第五七号、一八九〇年

⑥ 下澤保躬「陸奥弘前地方ニテ忌ム人名」『東人誌』第八卷第九〇号、一八九三年

なお、下澤の考古学に関する活動についてまとめたものに、拙考「下澤保躬の考古学」¹¹⁾がある。

三. 神田孝平書簡三通

次に、弘図に所蔵されている神田孝平の書簡三通（下澤保躬殿宛）

（kk289カン）について翻刻文を紹介する。

（一）書簡一（写真3・4）

（封筒表） 「青森縣弘前南川端町 下澤保躬殿 親展」

※二銭切手消印あり：神田局受付印 （明治）19年9月4日

弘前局受付印 （明治19年）9月10日

（封筒裏） 封は神田の朱印（印文は三字・読めず）：他に「神田孝

平」という鉛筆書きあり（異筆）

（本文）

寸措拜監致候、陳者（のぶれば）過般貴地遊歴之處、色々ト御配慮ニ預里（り）、諸名家ニ会合シ其収蔵を一覽いたし得¹²⁾益コト不少、殊ニ貴地之名家佐藤氏を得る事拙生大幸トスル所ニ御座候、拜奉別後浪岡ニテ御指定被下候人物御尋候處、是ハ何も奇物を所有致さ須（す）候處、此人を尋子（ね）候ニ付、浪岡ニ蓑虫老人¹³⁾之滞在セルコトヲ知り不斗（はからずも）面会一二所蔵品を見セ呉れ、且一少時間ナカラ当地古物談を承り大ニ樂シミ申候、夫より横穴へハ少年生を遣し¹⁴⁾、一覽の上略図取らせ申候、其者等申須（す）所ニ抛連（れ）ハ、穴居跡とも定カタキ敷ト相考申候、青森尔（に）てハ浅田老人¹⁵⁾ニ面し所蔵品召見奇品之分ヲ図を取らせ申候、其他の人尔（に）ハ面会の機会を得須（ず）、野辺地の豪家¹⁶⁾を相尋候處、書画類斗（ばかり）尔（に）て神代物者（は）なしとの事ニて面会セ須（す）して已ミ申候、夫より廣澤を訪ひ一日逗留、八ノ戸の橋本トハ廣澤懇意ニ致候由ナレトモ、是も書画骨董のミル（に）て、神代物なき事ハ慥ニ承知との事尔（に）て失望、岩手縣人ハ殆ト神代物の何タルを知らぬ気色に御座候、盛村之水野氏ハ蔵石の名家タルニハ相違なけ連（れ）とも、所謂顔石家尔（に）て神代石ハなし、アツタ処カ矢の根石（※石鏃）・雷斧（※石斧）等一・三品ニ過ぎ須（ず）ト見て、

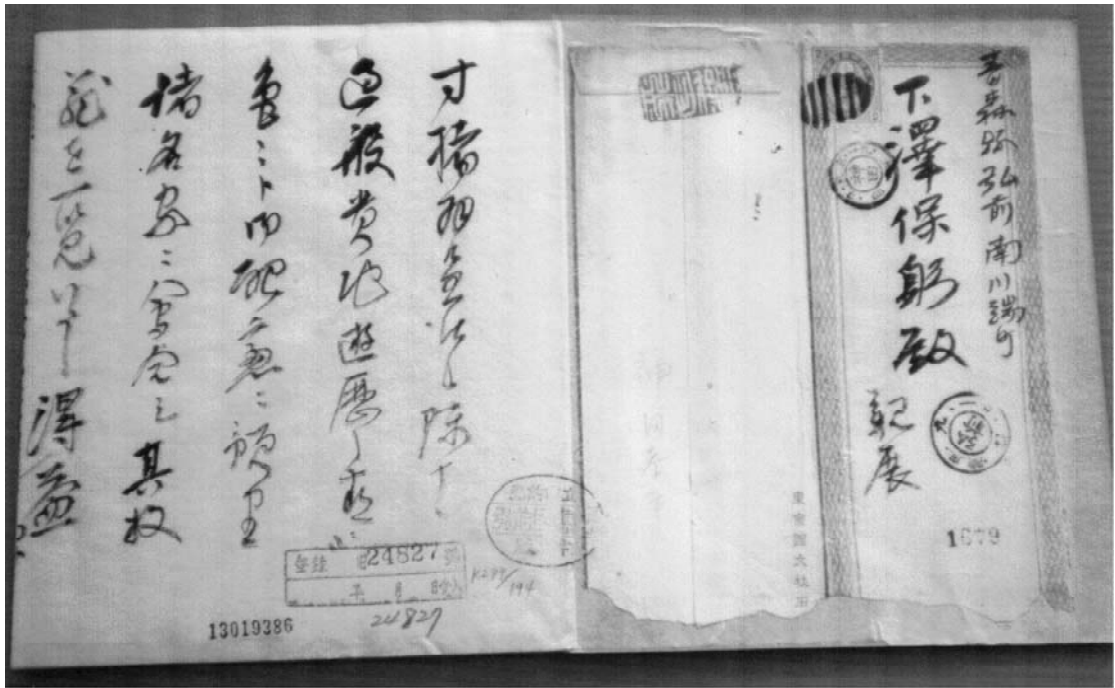


写真3 神田孝平書簡〔下澤保躬宛〕1 A (弘前市立弘前図書館蔵)

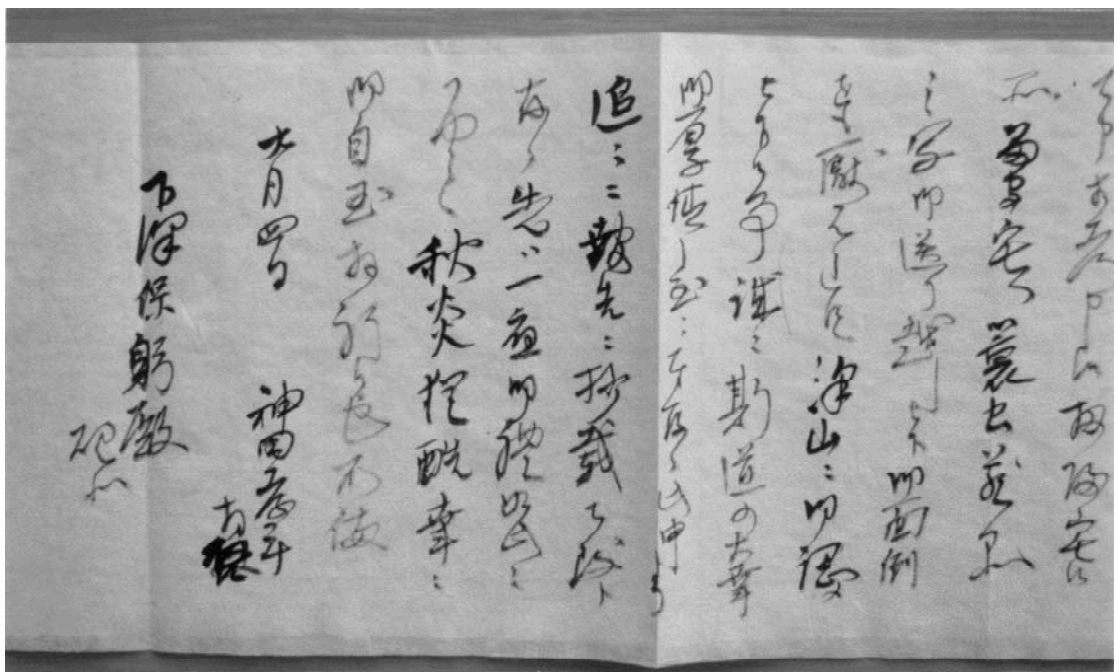


写真4 神田孝平書簡〔下澤保躬宛〕1 B (弘前市立弘前図書館蔵)

未た人の申須(す)ニよりは是も失望、神代物の事ハ其後断念、八月廿七日ニ爰元帰郷致し候条、御拝念可被下ル、此行庄内ニ於て者(は)羽柴雄輔(23)を伺、秋田ニ於て者(は)真嶋勇助(26)を伺、弘前ニ於て者(は)佐藤(27)を伺候事、大ニ進歩之助ニ成申候、此三人之所見を聞き收藏を見れハ、大略其地方の事ハ分り可申、相考申候、扱帰宅候所、留守宅へ葦虫蔵品之写御送り越し被下、御面倒をも厭者連須(はれず)、沢山ニ御認メ被下御事、誠ニ斯道の大幸御厚情之至ニ奉存候、此申より追々ニ報告ニ抄載被致ト存候、先ハ一応御礼如之ニ御座候、秋炎猶酷幸ニ御自国拜程候也、不備、

九月四日 神田孝平

拜啓

下澤保躬殿

硯処

(二) 書簡二(写真5)

(封筒表書き) : 封筒の製造元は不明・書簡一とは違う。

「青森縣弘前南(川)端町

下澤保躬殿 (切手) 一

※二銭切手消印あり : 神田局受付印 (明治) 20年3月10日

弘前局受付印 (明治20年) 3月18日

(封筒裏) 封は神田の朱印 : 他に「神田孝平殿より来書 丁亥三月十八日着二十日返事書」(下澤保躬筆)とあり。

(本文)

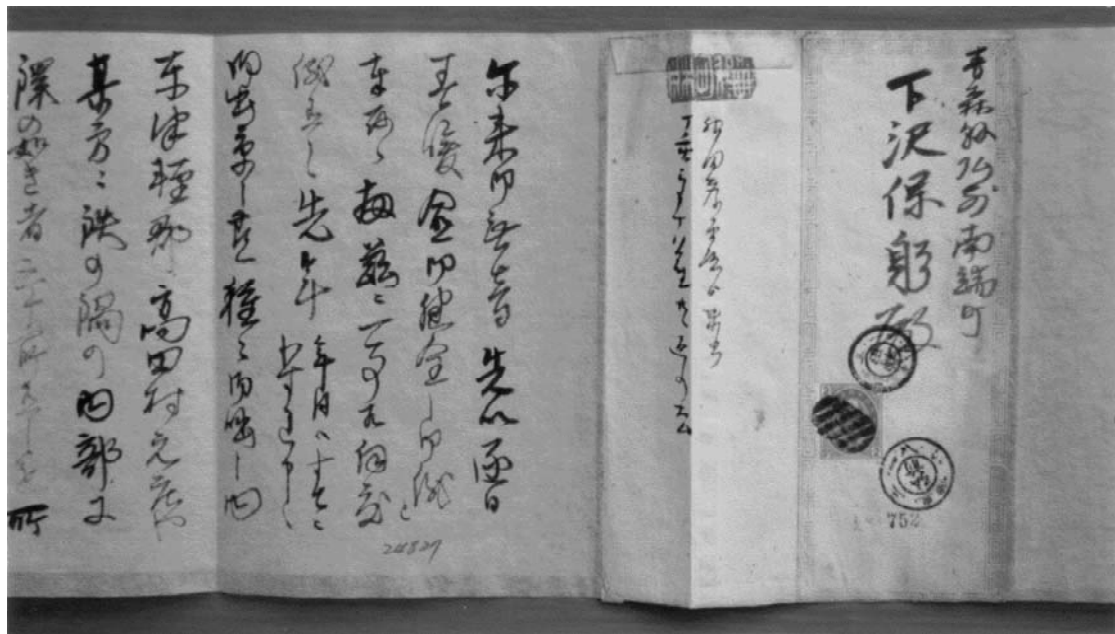


写真5 神田孝平書簡〔下澤保躬宛〕2 (弘前市立弘前図書館蔵)

尔来（じらい）御無音先以遂日春復、愈御健全之御儀と奉存候、拝茲二
一事相同度儀有之候、先年^{年月へすて二}_{わすれ申候}御出京之節、種々御咄し内

東津輕郡高田村元庄や某方ニ鉄の鍋の内部ル（に）環の如き者（物）三
ヶ所有之を所蔵いたすよし相伺申候、右鍋者（は）出所ハ土中より掘出
したる者（物）ニ可有之歟と相考申候、若シ御承知御聞候ハ、果して
然ルヤ否や一寸御一報被下度奉願候、此節此類の鍋の話ナシ追々ニ集ま
り実物も一品手ニ入り候間、取纏（まと）め一場の話ヲ編立度廉事ニ御
座候、岩木社石櫃の事、貴送之原文余り長く且ツ別事も交り有之候間、
手短ニ取編（まと）め報告ニ載セ申候、或ハ貴意ニ帙者（は）する所有
之候哉と痛止仕候、若し貴意ニ適者（かなは）さる処御座候ハ、正誤
を正候間、御申越相成候様相願申候、先ハ右願申候、草々敬具、

淡崖

三月十日

下澤保躬 様

硯処

（三）書簡三（写真6）

（封筒なし）

（本文）

拝見仕候佐藤図類御書入被成候ハ、御筆勞少なから須（ず）、未万謝至、
貴地古物愈出、愈奇、真古物の無尽蔵と申須（ず）へし、早晩安田を遣
し候ニ付、御譴責頗る厳酷なり、若し御望候ハ、相認可申候、然と色
（カ）古を尚ふ者ハ新物妙と色（カ）、尚ふニ是より須（ず）、況や妙な

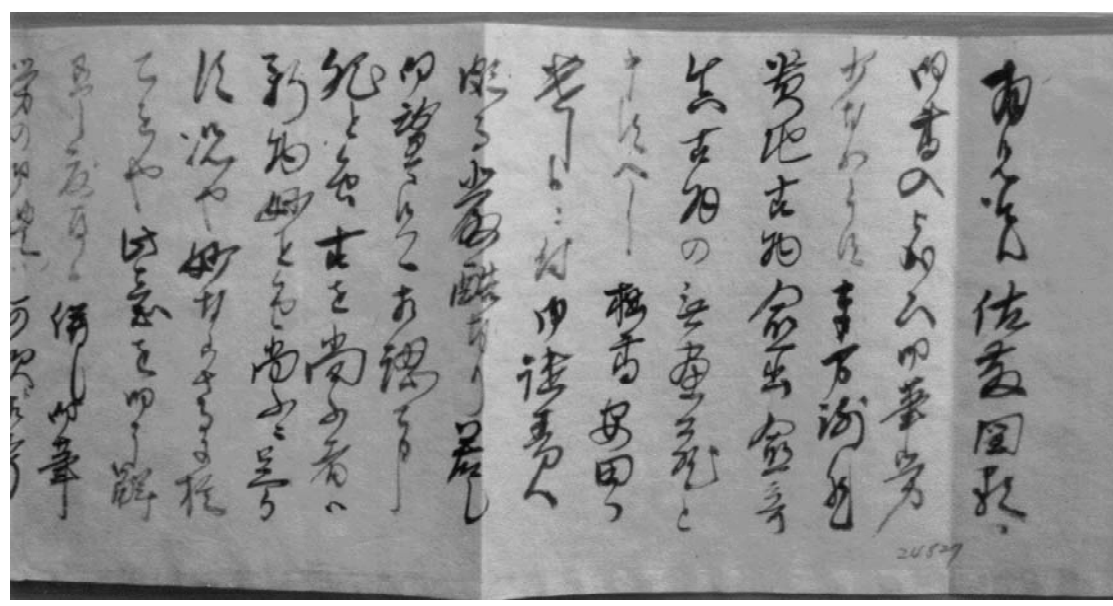


写真6 神田孝平書簡〔下澤保躬宛〕3（弘前市立弘前図書館蔵）

らざる尔(に) 於てをや、此意を御了解有申度存候、併し御筆勞の御礼
ハ何歟ト相考居申候、古人筆蹟類御慰ニ相成候得者(ば)、貴地ニ珍敷
者(物)を見立可申遣候、

此度ハ兔二角(とにかく) 一応御礼のミ、如此御座候、謹言、

九月五日

メ

下澤様

神田

桓下

拝収

(メの墨の一部有)

廿年 神田議官公ノ書(下澤の書)

※本文の読点等は翻刻者(福井敏隆)

四、神田孝平書簡の注釈

次に、これら三通について注釈をくわえてみよう。

(一) 書簡一について

これは、明治十九年夏に神田が行った奥羽旅行の途次、弘前で面会し、協力を得た下澤に対する礼状で、同十九年九月四日の奥付がある。この旅行については、神田の「奥羽巡回報告 明治十九年九月十九日 本會第廿二會ニ於テ述ブ」(『東人報』第二卷第一号、一八八七年)に掲載されている。出発から帰京まで四〇日間の旅を七頁にわたって順に記されているが、この書簡には、その報文にない内容も書かれている。

この奥羽巡回報告(以下、「巡回報告」と略記する)によると、その行程は以下の通りであった。東京を発ったあと、宇都宮・白河・福島・米沢を経て山形に入っている。庄内では鶴岡で、羽柴氏の斡旋で、羽柴・松森父子兄弟所蔵等の石器・土器・金属器などを見学している。この後、湯野浜で海水浴のため一週間逗留したのち酒田から、海路秋田に入り、秋田では眞崎氏所蔵の石器・土器・土偶など多数を見ている。その後、本県入りし、弘前南川端町居住の「旧友」下澤を訪ねた。ここで佐藤氏を紹介され、同氏所蔵の石皿・石鏃・石匙などの石器、多数の土器を見、この地方の第一等と評している。また、下澤は古物の所蔵はしないが老巧の古学者で、この地方の古事は彼に聞かなければわからないとして、横穴の有無を尋ねている。そして、下澤から紹介された横穴を、同行の長原氏が見に行ったが、奥行きが浅く人の住んだ跡ではなかったようである。下澤はここで「其外海岸には穴居跡と称する者がありますれど是は海濤の為に穿たれたる自然の洞穴で夫れに漁夫等が雨天の時に留宿する習なること年久しければ穴居の如くに見ゆる故に終に穴居跡といふに至りたるなり」と述べたという。また、ここでは、古陶器が掘り

出されることで有名な亀ヶ岡のことも紹介され、下澤・佐藤両氏に見学を勧められたが、コレラ流行の話が伝わってきており、場所が僻地で旅館もないなどの理由から結局は行けなかったという。この後浪岡では菘虫老人と号する奇人に会っている。古物好きで所蔵品が多数あるが、皆弘前に預けており、手元にあつた亀ヶ岡の土器でつくった煙草入れ、土偶の首を根付けにしたもの、ヒスイの大緒締おじめ、蕨手刀などを見せられている。青森では俳諧・歌を好み文雅の心ある人と評した浅田氏に会い、石皿と細長い無頭の石剣、近傍の練兵場修築の際に掘り出したという酸化鉄の入った土器を見せられている。七戸の宿では県職員立岩氏が出張で来ており、古墳から出土した内耳鉄鍋図1、『東人報』2-14）

を見せられている。神田は、この内耳鉄鍋のことはおつて論文で発表する予定である旨、記している。三沢の谷地頭では、旧友廣澤氏に会い、石皿と珍奇な石器を見ている。これは、あとで神田あてに送る予定のものであるという。岩手県福岡（現二戸市）では福岡駅（現二戸駅）の好古家小保内氏（※どういう人物か不明）から古陶器を見せられ、盛岡では博物館（※どこの博物館か不明）で蝦夷古陶器を見ている。また、平泉中尊寺では、宝物の石器を見ている。その後、仙台は先年調査したことがあるとし、福島は将来、来る機会があるとして素通りし、帰京している。

以上が、「巡回報告」の旅程であるが、これと今回の書簡一の記載と比較してみると、書簡の記載は、かなり簡略化されているが、そのなかに「巡回報告」にはない記載も見られる。まず、神田が八月二十七日（※金曜日）に帰京したという点であり、これによって「巡回報告」に

ある四〇日間という旅行期間を考え合わせると、東京を発つたのは七月十九日（月）であったことがわかる。また、「巡回報告」で青森で会った麻田氏というのは浅田祇年氏のこと、さらに野辺地の豪家を訪ねていること、また八戸では五代目橋本氏に会おうとしていたこと、盛岡では水野氏なる人物に会っていたことも新たにわかった。

ちなみに、神田が弘前で佐藤氏と出会ったのは、『佐藤蒔 考古画譜』（以下、『佐藤蒔画譜』と略記する）の石刀の図の付記に「明治十九年旧七月十三日草宅へ御来臨アツテ」とあることから、新暦八月十二日（木）であった。

（二）書簡二について

これは明治二十年三月十日の奥付のある短簡で、内側三ヶ所に環のようなものが付いた鉄鍋と岩木山神社の石櫃に関する内容である。まず、

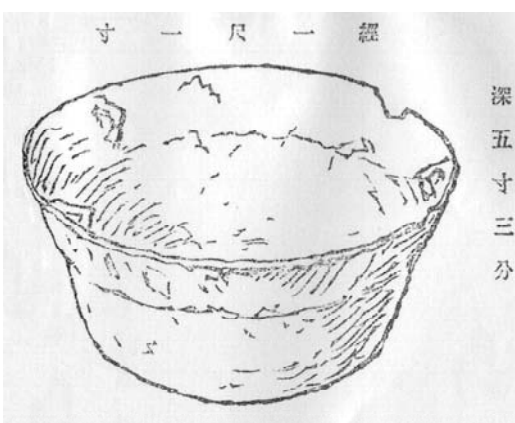


図1 洞内村（現十和田市）内耳鉄鍋
 『東人報』2-14。明治19年夏出土

内側に環のような物が付いた鉄鍋、すなわち内耳鉄鍋について神田は、「巡回報告」で下澤から初めてこの種の鍋が津軽にあることを知らされ、それ以来、強い関心をもっており、「取纏め一場の話を編立度廉事二御座候」とあるように、類例を集めていた。そこで、

下澤から聞いた高田村（現青森市）の元庄屋某氏の持っている内耳鉄鍋について、土中から掘り出されたものかどうか知らせて欲しい旨依頼した書簡である。書簡にある一場の話というのは、明治二十年四月の『東人報』第二卷第一四号に、神田が「内耳鍋の話 明治廿年二月十三日本會第廿七會ニ於テ述ブ」として掲載したものとみられる。ただ、この書簡は同年三月十日の奥付であることから、二月十三日の講演とはまた別の発表を考えていた可能性もあるが、二月十三日の講演内容を原稿起こしする際、急遽確認する必要が生じたため送った書簡である可能性がより高い。

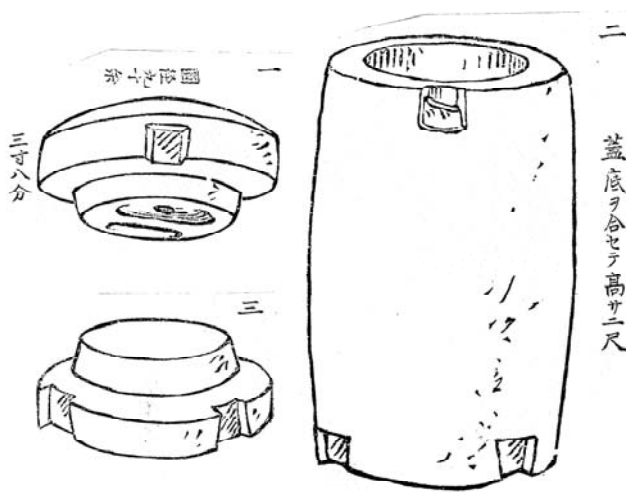


図2 岩木山神社石櫃（『東人報』2-12）

次に、岩木山神社の石櫃については、石櫃は円筒状の身と蓋からなる石製品（図2）で、百澤寺に保管されていたが、明治四年の廃寺後行方不明になっていったものを、六年九月に岩木山神社神官となった下澤が探し出し奉納させたものであり、これについて神田あてに書き送ったものである。しかし、余りに長文でしかも石櫃とは関係のない部分もあったため、神田の判断で短くして掲載し

たが、もし意にそぐわないところがあれば、正誤を付ける旨を伝えた内容である。この報文は、前述したように、明治二十年の『東人報』上に神田名で「岩木山神社石櫃ノ記」としてわずか二頁の短文となって掲載された。

（三）書簡三について

これは、末尾に明治二十年の神田議官からの書簡である旨下澤自身が記したもので、神田からのお礼の品、すなわち書簡にある「古人筆蹟類」に入れられていたと推測される書簡である。封筒はないが、九月五日の奥付がある。このなかでもっとも注目される文面は冒頭の二行である。佐藤氏の画に（下澤が何かを）書き入れてくれたことに対して礼を述べたあと、津軽ではますます古物が出て不思議である、古物が無尽蔵にある旨述べている。しかし、これだけでは何のことかまったくわからない。そこで、これに関わるような記事をこの一、二年間の『東人報』・『東人誌』に探してみると、明治二十年十二月の『東人誌』第三卷第二二号に、神田（淡厓）が「瓶ヶ岡土偶圖解（前號卷末ノ圖ヲ見ヨ）」として紹介した一文^⑩に行き着く。「此版二載スル所ノ物ハ陸奥弘前ノ會員佐藤部氏力描キ送ラレタル瓦偶（※土偶）ノ圖ナリ：（中略）：下澤氏ノ記文ニ云ク明治二十年五月（※図3の付箋には四月とある）青森縣下陸奥國西津輕郡瓶ヶ岡村領ノ中瓶山ト云フ地ヨリ掘得タリ此物ハ色薄黒ク鉢内ウツロニシテ其ウツロハ鉢ノ下ノ方ヨリ上ノ方冠：」の記述で、亀ヶ岡発見の土偶の発見年月、形状、所蔵者等について記した一文である。このなかの「佐藤部氏力描キ送ラレタル瓦偶ノ図」「下澤氏ノ記文

ニ云ク」が鍵になる。実は、この記載内容と酷似したものが、弘前大学北日本考古学研究中心ター成田コレクシヨンの『佐藤蒞画譜』の「大ノ人形ノ図」^①に貼られた付箋にある。「大ノ人形ノ図」(図3)というのは、考古学の概説書や博物館の展示図録等で馴染み深い亀ヶ岡遺跡(国史跡、現つがる市)発見の、左足を欠いた遮光器土偶(高さ三四・三センチ。国重文。東京国立博物館所蔵)のことである。

このことからこの書簡は、佐藤氏の土偶原画に貼られた付箋と同じ内容のものを下澤に書いて貰ったことに対する礼状であったと考えられる。神田は、佐藤氏から直接送られてきた土偶原画を見て驚き、『東人誌』に掲載しようとしたものの、おそらく発見場所や発見年月日等が不明であったため、とりあえず、「陸奥瓶ヶ岡にて獲たる土偶の圖 瓦偶人之

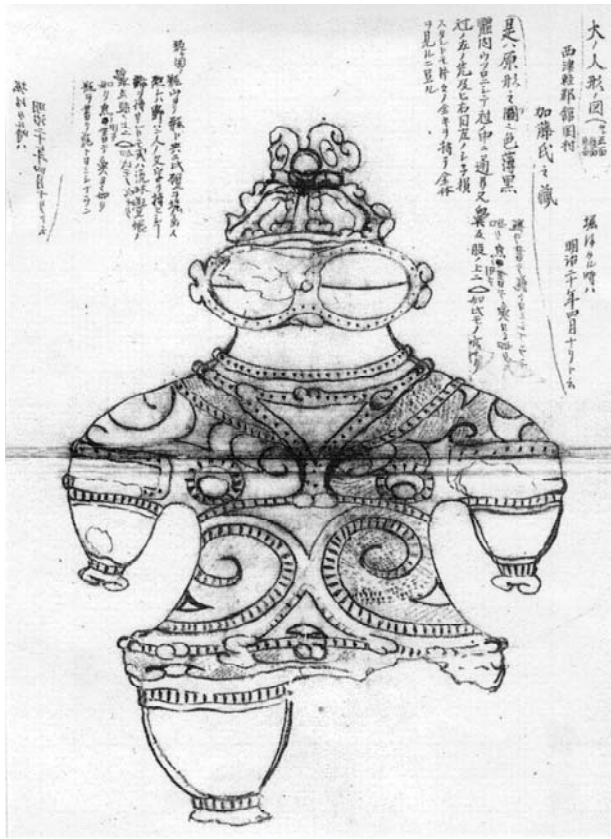


図3 亀ヶ岡「大ノ人形ノ図」(『佐藤蒞画譜』)

「圖」として明治二十年十一月の『東人誌』第三卷第二号巻末に載せておき、発見地や年月日について、急遽下澤宅に安田氏を遣わして執筆(※神田の言う「記文」を依頼したとみられる。そして、その記文が届いた段階で翌十二月号に掲載したということであろう。

ちなみに、この土偶の出土年月日については、この土偶が昭和三十一年五月十四日付で県重宝「亀ヶ岡式土偶」(翌三十二年二月十九日付で重文「土偶」に指定)に指定された際の「青森県文化財台帳」には、明治二十年閏四月十一日に亀ヶ岡(※館岡の誤りであろう)字沢根(現つがる市木造館岡沢根)七十五番地から出土したと記載されている。この月日は新暦に換算すれば六月二日(土)にあたり、上記の「五月とする記文」・「四月とする付箋」のいずれとも異なることになる。ただし、「四月とする付箋」を「閏四月とする付箋」と解すれば、整合性がとれる。『東人誌』の五月は誤植であろう。

五. おわりに

以上、紹介してきた三通の書簡は、陸奥(本県)の考古家と東京人類学会の中心人物である神田との関わりが示されており、草創期の陸奥考古学界の一面をうかがわせてくれる資料として注目されるものである。

とくに書簡一は明治十九年夏の神田の奥羽巡回旅行に関わる内容である。この神田の旅は、その後ただちに成果を現し、同年十一月にはさつそく佐藤氏が本県人として最初の東京人類学会員となり、その後弘前の安田氏、三沢の廣澤氏、弘前の外崎氏と入会が続いた。下澤は入会は

しなかったが、十九年十二月には県人としては最初の報文を寄せている。神田の旅行中に出会った奥羽の考古家は、おそらく神田から、東京人類学会への入会や『東人報』への寄稿を薦められていたであろうことは、想像に難くない。

この旅行を通じて、東京人類学会と陸奥の考古家との関わりができ、本県人の寄稿の増加、簗虫の亀ヶ岡遺跡の発掘、さらに明治二十二年の東京人類学会、二十八・九年の帝国大学（現東京大学）による亀ヶ岡遺跡の発掘調査へとつながることになるわけで、まさに本県考古学界草創期の隆盛へ向かわせる切っ掛けとなったことが理解される。

また、書簡三は、亀ヶ岡遺跡の国重文・遮光器土偶が初めて全国誌へ掲載される経緯に関わる内容で、きわめて重要である。

ところで、上記書簡に関連することであるが、実は弘前大学文学部北日本考古学研究センターの成田コレクションにも神田が下澤にあてた書簡一通がある。青森市の医師成田彦榮氏（一八九八～一九五九）が、交遊があった晩年の佐藤氏から出土品や画譜とともに引き継いだもので、明治十九年六月二十一日の奥付があり、本稿の書簡一よりも二ヶ月半ほど前のものである。内容は、神田の二ヶ月後の奥羽巡回旅行を前もって伝える内容のものではなく、同年四月二十五日に東京・叢書閣から出版したばかりの『日本大古石器考』³⁾を近々、下澤に贈呈する予定であることなどが記されたものである。神田は「巡回報告」のなかで、下澤を「旧友」と表現しているが、双方の交遊がいつから始まったのかということが、実は以前から興味があった。おそらく、神田が兵庫県令を終え元老院議員となっていた明治九年九月以降、下澤が上京し『津軽旧記類

纂』を編纂・校訂し、十一年に修史館に献上するまでの間がもつとも可能性が高いと考えているが、この書簡は、双方の交流が少なくとも明治十九年六月二十一日以前にあったことも示しており注目される。

以上、神田孝平の下澤保躬あての書簡三通を紹介し注釈をくわえさせていた。本稿を終えるにあたって、神田孝平書簡を利用させていただいた弘前市立弘前図書館、および種々ご教示いただいた元弘前大学文学部の藤沼邦彦氏、弘前大学文学部の関根達人氏、岐阜県垂井町教育委員会タリイピアセンターの原田義久氏、関西大学博物館の山口卓也氏に対し、心から感謝申し上げる次第である。

註

- (1) 神田乃武編『神田孝平略傳』東京市、一九一〇年
- (2) T. KANDA, TRANSLATED BY N. KANDA, B. A. 『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS OF JAPAN』KOKUBUNSHA, 一八八四年（斎藤 忠編著『日本考古学史資料集成2 明治時代1』吉川弘文館、一九七九年に再録）
- (3) 神田孝平『日本大古石器考』叢書閣、一八八六年（斎藤忠編著の前掲書に再録）
- (4) 青森縣立図書館・青森縣叢書刊行会『津軽古今偉業記 津軽興業誌』青森縣叢書第四編、一九五三年
- (5) 田沢 正編『閑雲下澤保躬先生を仰ぐ 御遺稿と関係書簡集』閑雲下澤保躬先生の遺稿を読む会、一九九一年
- (6) 下澤保躬「石ノ鞋草卜稱フル古石器」『東人報』第二卷第一〇号、一八八六年
- (7) 関根達人編『佐藤 葩 考古画譜I』弘前大学文学部附属 亀ヶ岡

文化研究センター、二〇〇九年

(8) 上條信彦編『佐藤 蒨 考古画譜Ⅲ』弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター、二〇一一年

(9) 後述するが、下澤の原稿を神田が簡略化して、神田名で掲載。

(10) 後述するが、下澤送付の付箋を神田が文章化して、神田(淡厓)名で掲載。

(11) 福田友之「下澤保躬の考古学」『青森県考古学』第一七号、二〇〇九年。本稿に関して、個人的な話で恐縮であるが、下澤は、実は筆者(福田)の父方の祖母(下澤みゑ)の母(下澤きよ)の兄、つまり祖母の伯父にあたる。本稿に掲載した下澤の写真は、筆者の所蔵である。

(12) 佐藤 蒨(一八五二〜一九四四)。弘前生まれで平尾魯仙門下の日本画家(号は仙之)であるが、考古研究者としても知られており、仙台市の東北大学大学院文学研究科考古学陳列館(赤煉瓦書庫)には久原コレクションとして、彼の収集品が収蔵され、弘前大学人文学部北日本考古学研究センターには、成田コレクションとして、収集品や出土品を描いた図が多数収蔵されている。神田が訪問した当時は、弘前亀甲町百八番地に居住していた。なお、下澤と佐藤氏は、弘前の平尾魯仙(一八〇八〜八〇)門下に、佐藤氏が明治七年に弟子入りしたところからの旧知の間柄であったと思われる。後述の書簡三に関わるとみられる佐藤氏の亀ヶ岡の大土偶画は明治二十年の『東人誌』第三卷第二一号に掲載された。また、佐藤氏の論文のなかで、明治二十三年の『東人誌』第五卷第四七号に発表した「アイヌの口碑ヲ駁シ併セテ本邦石器時代ノ遺物遺跡ハアイヌノ者ナルヲ論ス」は、神田の後、東京人類学会二代目会長になる坪井正五郎(当時は英国留学中)の石器時代人IIコロポックル説に対して、アイヌ説をもって反駁したものである。

(13) 「東京人類学会々員宿所姓名録」『東人誌』第三卷第二一号附録、一八

八七年

(14) 土岐源吾、通称蓑虫山人(一八三六〜一九〇〇)。美濃出身。放浪の画人で好古家としても知られ、明治十一年に本県に来て以来、二十年まで県内各地の名勝・史蹟・古器物等を独特の水彩画に残した。明治十七・二十年に亀ヶ岡を発掘し、二十年の発掘状況については、蓑虫「陸奥瓶岡ニテ未曾有ノ發見 津軽ノ蓑虫翁ノ手柬」『東人報』第二卷第一六号、一八八七年)として報告されている。『蓑虫山人と青森』(青森県立郷土館、二〇〇八年)には、明治十七年の発掘状況を描いた絵が掲載されている。

(15) 長原孝太郎(一八六四〜一九三〇)のことである。東京人類学会会員であるが、神田との関係では、神田の郷里の恩人の遺児で、当時は、東京・神田淡路町二丁目九番地の神田邸に書生として住込み絵画を専攻しており、古器物の写生を得意とした。この旅行には神田の助手として随行した。洋画家でのちに東京美術学校教授。

(16) 浅田祇年(一八一二〜九六)とみられる。『青森県人名大事典』(東奥日報社、一九六九年)によれば、本名は理助。青森の俳人で菓子舗「甘精堂」を創設した人物で、青森市の合浦公園には、明治二十九年九月九日建立の句碑がある。句碑はこのほかに、栄町の遊歩道「文芸のこみち」にもある。蓑虫の画いた『陸奥全国神代石古陶之図』の土器・石器計七点に所蔵者として青森の浅田氏、一点に浅田萬兵衛の名が記されているが、この浅田氏は祇年であろう。ただし、浅田萬兵衛なる人物については、祇年かどうかも含めて不明である。このほかに、『佐藤蒨画譜』にも、祇年が原別村(現青森市)出土の縄文晩期初頭(大洞B式)の朱塗壺を持っていたことが記されており、祇年は出土品の収集も行っていたことがわかる。

(17) 藤沼邦彦・深見 嶺・工藤清泰「蓑虫山人の『陸奥全国神代石古陶之

図と青森新聞の『第二回弘前博覧会縦覧の記』について、『亀ヶ岡文化雑考集(付・研究報告索引)』弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター、二〇〇八年

(18) 関根達人編『佐藤 郁 考古画譜Ⅱ』弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター、二〇一〇年

(19) 六代目野村治三郎のことか。

(20) 廣澤安任(ひろさわやすとら)(一八三〇〜九一)のことで、前掲『青森県人名大事典』によれば、会津若松生まれ。戊辰敗戦後、下北に転封され成立した斗南藩の要職を務め、三澤村(現三沢市)谷地頭にわが国最初の洋式牧場を開いた人物として知られる。この一方、牧場で発見される土器類にも関心をもち、明治二十年五〜六月に東京人類学会員になり、明治二十年『東人報』第二巻第一号には「アイノ遺跡ノ事」を寄稿し、そのなかで二ツ森貝塚(現七戸町。国史跡)のことを初めて紹介した。

(21) 橋本八右衛門のこととみられ、前掲『青森県人名大事典』によれば、本名は橋本昭則(はしもとあきのり)(一八五三〜八七)。「河内屋」橋本家五代目で、奥羽菊栽培功労者で史書・歌書・絵画等を多数収集していた。

(22) 盛村には当時の気仙郡盛村で現在の大船渡市が該当するが、盛岡の記載違いとみられる。

(23) どのような人物かまったく不明。

(24) 羽柴雄輔(はしばゆうすけ)(一八五一〜一九二二)は山形県松山町(現酒田市)生まれ。東京人類学会会員で明治二十三年十月に酒田に、東京人類学会の兄弟会ともされる奥羽人類学会を創設。下澤とも交遊関係があった。

(25) 國分剛二「下澤保躬と羽柴雄輔の交遊」『思遠會會報』第五号、一九三六年

(26) 眞崎勇助(まざきゆうすけ)(一八四一〜一九一七)。秋田生まれ。東京人類学会会員。秋田県史編纂委員。秋田県立博物館に彼のコレクションが所蔵されている。

る。

(27) 安田雄吉とみられる。この人物は、不明な部分が多いため、これまで知り得た点を書き留めておくと、「東京人類学会々員宿所姓名録」¹³⁾では、弘前の土手町五五番地(現下土手町「中三」向かい)居住の古物商とあり、明治二十(一八八七)年四〜五月に東京人類学会に入会したが、二十三年十月調べの「東京人類学会々員一覽表」(『東人誌』第五号)には、掲載されていないため、退会したとみられる。書簡には神田が遣わした人物となっていることから、双方はそれ以前の知り合いであったと推測される。また、書簡の「御譴責頗る厳酷云々」の意味するところは不明である。安田氏は、二十一年五月十八日、六月二十日には、弘前の外崎覺藏・佐藤氏らとともに、湯口村(現弘前市)字下り山の遺跡発掘に出かけている。また、『東奥日報』第一六九号(二十二年七月廿八日付)には、二十二年七月二十日に、帝国大学人類学教室主事で東京人類学会幹事の若林勝邦(一八六二〜一九〇四、江戸生れ)が、亀ヶ岡遺跡調査のため来県し弘前に寄った際、外崎・佐藤両氏とともに、上述の湯口村の遺跡調査に同行した人物として安田勇と記されているのは、安田雄吉氏とみられる。また、二十八年十月三日に、亀ヶ岡遺跡調査のため来県した帝国大学理科大学人類学教室助手の佐藤傳藏(東京人類学会会員。一八七〇〜一九二八)が、弘前に立ち寄った際に、同氏を案内している。また、所藏品では、縄文晩期の壺形土器を一点持っていたことが判明している。生没年は不明であるが、明治十三年八月十一日から二十五日まで、弘前の下白銀町にあった東奥義塾で開催された「弘前第二回博覧會」に、「葺形茶盆」を出品した安田勇吉(明治十三年九月十三日付『青森新聞』第二六二号)は安田雄吉氏とみられ、さらに、昭和三(一九二八)年九月十四日から十八日まで青森市公会堂で行われた東奥日報社主催の御即位御大典奉祝及び本社創立滿四十年記念の「青森縣

文化象徴展覧會」に、「神瀝澤長慶天皇陵墓參考地寫眞」を出品しており、長寿を全うした人物とみられる。ちなみに、この展覧会には、前述の佐藤氏も石器・土器や書画・文献を出品している。

(28) 外崎覺藏(外崎覺とも。一八五九〜一九三二)。この当時は東奥義塾教員で、明治二十一年三月に東京人類学会入会。のちに宮内省庁陵墓監などを歴任。漢学者・郷土史家。

(29) 外崎覺藏「陸奥津輕郡湯口村古物發見」『東人誌』第三卷第二七号、一八八八年、「陸奥國津輕湯口村奇器を出す」『東人誌』第四卷第三四号、一八八八年

(30) 佐藤傳藏「東北三縣旅行につき」『東人誌』第一卷第一一六号、一八九五年

(31) 東奥日報社編纂『御大典奉祝創業四十年記念 青森縣總覽 (一名) 青森縣四十年畧史』、一九二八年

(32) 註(27)に記した「弘前第二回博覽會」には、「長圓形石櫃百澤元宮ヨリ堀出岩木山神社寶藏」として出品されている(明治十三年九月十三日付『青森新聞』第二六二号)。関根達人氏は、『あおもり歴史モノ語り』(無名舎出版、二〇〇八年)のなかで、この石櫃は、経筒ないしは、経塚を納める外容器であった可能性があると述べている。

(33) 暦の会編著『暦の百科事典2000年版』本の友社、一九九九年

(34) 福田友之「亀ヶ岡発掘をめぐる人びと―東京人類学会との関わりを中心に―」『青森県考古学』第二二号、二〇一四年

(ふくだ・ともゆき 青森県史編さん企画編集委員・考古部会長)
(ふくい・としたか 弘前大学國史研究会会員)